

Title	柳川堀割「ウナギ物語」にみる、地域活動コミュニティについての考察
Author(s)	堀, 友彌
Citation	デザイン学論考 = Discussions on studies of design (2019), 15: 34-40
Issue Date	2019-02
URL	http://hdl.handle.net/2433/237373
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

柳川堀割「ウナギ物語」にみる、 地域活動コミュニティについての考察

The Story of the "Eel Community" in Yanagawa

堀 友彌

HORI, Tomoya

京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻博士後期課程3回生
京都大学デザイン学大学院連携プログラム1期生



1. はじめに

筆者はデザイン学の一期生としてまだ教員や学生を含めた組織全体が手探り状態であった初期よりプログラムに関わってきた。しかし恥ずかしながら一度もデザイン学論考に寄稿したことがなく、一度はという想いのまま最終号を迎えてしまった。筆者自身のデザイン学プログラムへの貢献度は決して大きいとは言えず恐縮の至りであるが、論考へ寄稿する機会を得られたことをまず感謝したい。

筆者の専門は生物学、行動生態学、水産学の領域に区分されるが、情報機器を用いた研究であったこともあり情報学分野の一旦としてデザイン学に加わることができた。プログラム生として活動したモチベーションの1つとして、自身の研究が社会においてどのような役割を担い、またその成果がどのように発展していくのかをより明確にしたいという想いがあった。それ故、FBL/PBLやフィールドインターンシップといったデザイン学科目では、対象のフィールドにおいて社会やコミュニティを構成する異なる立場の人々や彼らが生活する環境、文化などを調査して街並みや景観、居住のスタイルや観光のあり方をデザインするテーマを選択していた。それにより各地域、そのコミュニティに関わる人物やその関係性、そして人々が協働する上での事例や問題点について学んだ。そしてデザイン学プログラムとは別に、このたび福岡県柳川市で行われている地域活動に当研究室の三田村啓理准教授と共に研究者の立場として加わる機会を得た。具体的には後述するバイオテレメトリー調査における機材の取り扱いやデータ解析の指導や補助を行い、学術的な視点から活動への助言を行う役割を担う。まさにプログラムで学んだことを実践する...とまではいかないかもしれないが、プログラム履修以前の自分とは違った視点でこの活動を観察できているのではと自負している。

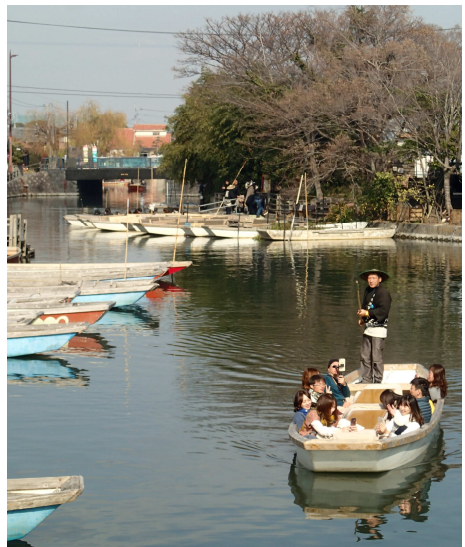
本稿では筆者が関わるコミュニティ活動を一例として紹介し、その形態と形成過程に注目して考察を行いたい。正確には社会学分野の話であり浅学な文章になることをご了承いただきたいが、筆者自身が経験し感じたことを共有する。

2. 柳川堀割「ウナギ物語」

2.1 柳川とウナギ

まず本稿の舞台である福岡県柳川市について紹介したい。柳川市は福岡県南部の筑後地方に位置し、隣接する有明海の干拓地において海苔養殖と販売が盛んに行われている商業地である。また、詩人・北原白秋生誕の地としても知られ、国内外を含め多くの人々が訪れるスポットを複数有した観光地でもある。そのなかでも市街地を縦横無尽に流れる堀割を巡る「川下り」が人気を博している（pic. 1）。柳川市内には明治に消失した柳河城を囲っていた堀割が南北に巡らされており、船頭が竹竿で観光客10人ほどが乗った木造の小舟を巧みに操って、水路を進みながら市内を案内する。この堀割は農業用の水瓶としての役割も果たしており、古くは生活用水や食用生物の採取、水遊びなどレクリエーションの場としても利用されていた。柳川堀割の歴史や文化については高畑勲のドキュメンタリー映画「柳川堀割物語」で詳しく描かれているので是非ご覧いただきたいⁱ。

川下りの船着場周辺には「ウナギのせいり蒸し」の店が建ち並び、柳川における名物の1つになっているⁱⁱ。市民の間でもうなぎは古くから食文化として根付いたことが知られており、堀割にも多くのニホンウナギ（以下、ウナギ）が生息していた。しかし、今現在の堀割に野生のウナギはほとんど残っていないと考えられている。ウナギがいなくなった原因としては堀割と海を隔てる堰がウナギの侵入を阻害していることが主な原因と示唆されているⁱⁱⁱ。ウナギの産卵場はマリアナ海溝周辺と判明しており、生まれた仔魚は海流によって運ばれながら成長し日本や東アジアの沿岸域に接岸する。そしてシラ



pic.1 堀割川下りの様子

ⁱ 高畑勲、宮崎駿：柳川堀割物語。二馬力、1987。

ⁱⁱ 余談であるが、市民談によると元デニスプレイヤーの松岡修造さんは柳川高校出身であり、大会で優勝した際はご褒美にウナギを食べさせてもらっていたとか。また、柳川と聞くとドジョウを使った柳川鍋を連想される方も少なくないが柳川市にはそのような食文化はなく、「柳川屋」という料理屋が作ったことが名前の由来という説が有力である。

ⁱⁱⁱ 福岡県立伝習館高等学校 生物部：森里海の繋がりにから見えてきたニホンウナギと私たちの未来 ～特別採捕・飼育・放流から～. http://www.japanriver.or.jp/taisyo/oubo_jyusyou/jyusyou_katudou/no20/no20_pdf/denshukan.pdf（最終アクセス 2019年2月15日）

スウナギとして各河川に侵入するが、柳川の堀割には入ることができないことから新しい個体の加入が行われずにウナギの数が減少していったと考えられる。

2.2 ウナギを取り戻す活動

ニホンウナギは2014年にIUCN（国際自然保護連合）の絶滅危惧IB類に指定され、日本ではウナギを食べ続けることへの物議が巻き起こっている。そしてこの指定が柳川堀割にウナギを呼び戻す活動の発端となった。この活動は地元校である福岡県立伝習館高校生物部（顧問の木庭慎治先生と学生達）、地元のNPO法人「SPERA森里海・時代を拓く」（以下、SPERA）、SPERAの理事をされている京都大学名誉教授の田中克先生を中心に行われている。そしてウナギ研究者である九州大学農学部望岡典隆先生の指導のもと高校生が主体となって動き、堀割の環境調査、堀割へのシラスウナギの放流と再捕による成長度合いの研究、などが主に行われてきた^{iv}。その結果、高校生たちの研究成果は第20回日本水大賞で文部科学大臣賞、平成30年度日本水産学会春季大会高校生発表で奨励賞を受賞している。

その後、2018年より筆者の所属する研究室が活動に加わり、発信器と受信機で生物を追跡するバイオテレメトリーを用いて堀割におけるウナギの行動調査が始まった（pic. 2）。堀割に受信機を設置してウナギの移動や活動の情報を得ると共に、手持ちで持ち運べる受信機を用意して人々が堀割のどこにウナギがいるかを自身で考えて捜索できる体制を整えた。これにより高校生による調査が次の段階に進むだけでなく、地域住民が受信機を持ってウナギを探すといった、より地域に密着した活動が展開可能になった。このように今まさに柳川堀割物語ならぬ、柳川堀割「ウナギ物語」が進行している。



pic.2 バイオロギング調査の様子

^{iv} 本稿の趣旨とは離れるため具体的な活動内容などは参考文献iiiを参照いただきたい。

3. コミュニティの形成過程

3.1 ウナギコミュニティ形成の流れ

平本（2015）は「コミュニティ」という概念の曖昧さや使用する際の定義の必要性を論じており^v、またこの活動グループは正確にはマッキーバーが言うところの「アソシエーション（一定の目的のために意図的に作られた集団）」であるかもしれない^{vi}。しかしウナギ活動集団の形成過程には偶発的な点が多く、本稿では柳川堀割ウナギ活動に関わる人々の集団を平本（2015）がいうところのバズワードとしての「コミュニティ」と定義する^{vii}。この「ウナギを呼び戻す活動のコミュニティ（以下、ウナギコミュニティ）」が生まれた簡略な経緯や、構成する人達はなぜ共同で活動することになったのかを説明する。

ウナギコミュニティの母体であり主に裏方として活動を支えているSPERAは、運営する内山さん夫妻を中心に水生生物飼育を楽しむメンバーで構成された任意団体であったと伺っている。そして有明海で調査をフィールドとしていた田中先生と所属学生が柳川で宿泊した際に、偶然にも内山夫妻が経営する「さいふや旅館」を利用していたことから双方の繋がりが生まれた。そして徐々に交流が深まるうちに田中先生が提唱する「森里海連携学」^{viii}に内山夫妻が深く感銘を受け、有明海の環境再生を目指す活動を開始したことでSPERAが誕生した。その後、同じく有明海において活動を行っていた伝習館高校生物部と出会い、田中先生の紹介で望岡先生が加わったことで、ウナギコミュニティが誕生することとなった。

3.2 地域が加わったウナギコミュニティへ

先に示した通りこのウナギコミュニティは近い目的意識を持った個々が偶発的に出会い、そして新たな目標に向けて協働を開始した集団であると考えられる。その集団をさらに大きくグループ分けすると、伝習館高校、SPERA、大学となる。柳川にウナギを取り戻すという活動理念は各グループ間の共通認識であり不変の目標であるが、それを達成する以外にも各々が得るものは決して小さくはないことが円滑な活動の推進に繋がっていると考えられる。例えば、高校生にとってこの活動は教育的・学術的な実務経験を得る機会であり、また関わる人々からの学びは将来的な進路選択などにも有益になると考えられる。

^v 平本 毅：コミュニティのデザイン。デザイン学論考, Vol. 4, pp.16-22, 2015.

^{vi} MacIver, R. : Community: A Sociological Study. Macmillan, London, 1917.

^{vii} 後述する地域住民コミュニティが参加可能な活動状態に移行しつつあるのでより本来での意味でのコミュニティに近づいていると考えられる。また、筆者が活動について説明する際に「コミュニティ」と言った方が受け取り側にニュアンスが伝わりやすかった経験より。

^{viii} 田中 克：森里海連携学への道。旬報社、東京、2008.

SPERAからすれば柳川堀割の歴史文化と観光資源の保全に貢献できるとともに、今後の地域活動の場を広げる好機となっているだろう。大学教員からすればニホンウナギの資源保全へと寄与する学術的な成果を得るとともに、高校生や地域住民に研究活動を周知することで社会が有する諸問題への理解や将来的な研究の担い手を得る機会となる。

そして現在はこのコミュニティに地域住民が加わりつつある状態である。バイオテレメトリーにより地域住民が放流ウナギ搜索に参加できるようになった点とはもとより^{ix}、筆者は実際に柳川に訪れて活動に参加したことで地域住民の関心の高さを肌で感じた。まず、バイオテレメトリー調査費用を獲得するために行われたクラウドファンディングには、目標金額120万円を超える支援金が集まった^x。筆者が助力した調査においても、発信器を装着したウナギの放流には調査関係者、報道陣、一般参加者を含め50人近くが4隻の船に乗って参加した。正直に言うと、この活動のお話をいただいた時には予想もしていなかった規模の人々が現場に集まっていた。

この活動が地域に注目された理由は何だったのだろうか。地元の柳川堀割で行われるイベント、京都大学の先生が行う調査の様子を間近で観ることができる機会、などが注目を集めたポイントであった可能性は高い。しかし伝習館高校の学生が主体となって調査が行われるという点が活動の注目度を引き上げたのではないかと筆者は考える。先に記載した2つの受賞歴は地元でも報道されており、地域の若い人材への親近感やその活躍を応援する心情がウナギ活動への興味や関心を促進する起点になったのではないだろうか。筆者はこの点について学術的に論じる術を有していないが、近年注目される地域コミュニティの存続や活性化を議論する上で有用な事例に立ち会えたのではないかと感じている。

3.3 人が集う場所の重要性

ウナギコミュニティが形成された経緯については解説したが、その形成過程において一番重要だったイベントは内山さん夫妻と田中先生の出会であろう。SPERAの拠点である「さいふや旅館」には喫茶店兼バーのようなカフェが隣接しており、SPERAのメンバーをはじめとした人々の憩いの場として利用されている。この場において内山さんは田中先生と10年以上の歳月をかけて交流を深め、趣味であるジャズミュージックが流れる中で多くのことを議論しあったことが現在の活動に繋がっているのは疑いようがない。この場で行われた交流は、

^{ix} 正確には準備が整った段階であり、地域住民の本格的な活動への参加は今後実施される予定である。

^x クラウドファンディングサイト「Readyfor」上の「うなぎバイオリギングが繋ぐ夢の世界」
<https://readyfor.jp/projects/mekajya/announcements/87345>（最終アクセス 2019年2月15日）

ある目的へ向け意欲ある活動を行いたい人々とそれを導く有識者が時間をかけながら協働へと向かった事例ではと考える。デザイン学プログラムにおいてはKRPのデザインイノベーション拠点が異分野や他組織との連携・交流の場として利用されていたが、柳川においても人が繋がる場が機能して協働へと導く礎ができていたことが非常に興味深かった。

また、伝習館高校生物部顧問の木庭先生が学生たちの活動の支援にご尽力されていることで円滑な活動の推進が実現している。公立高校において本来は勤務外である休日の活動へも参加して学生をサポートするなど、顧問としての役割以上の働きを担っておられる^{xi}。そのためウナギコミュニティに伝習高校生物部が加わる経緯には木庭先生が大きな役割を果たしたと考えられる。それゆえ、ウナギコミュニティは木庭先生、内山さん、田中先生が有明海での個々の活動を通じて出会い、結成された集団であるとも言える。有明海は周辺地域にとって水産業などの面においてかけがえのない財産であり、その存続を願い活動する個々が集ったことで、今度は同じく地域の財産である柳川堀割を舞台とした集団が形成された。このような集団形成の場から次の協働の場へ移行する際に、個々の役割の変化などが起こりその後の活動へ影響を与えていることが考えられるが、現在はそれを検証できる十分な情報や術を持たないため、論考はここまでに留める。

4. おわりに

タイトルで考察と謳っておきながらほぼ地域活動の紹介になってしまった点や、語彙力・文章力の無さについては、物事を解き明かし伝えることを生業にすることを目指す筆者の今後の課題とさせて頂きたい。柳川で見たこと関わったことを可能な限り簡潔に述べたつもりであるが、ウナギコミュニティへ興味を持っていた方、そこで起こった事象の捉え方などにご意見を持っていた方は、今後お会いする機会があれば是非ご教授いただきたく存じます。

最後にウナギコミュニティで出会った中学生K君の話をして本稿を締めさせていたきたい。彼は福岡県内の別の市から親御さんに車で送迎してもらいながらウナギ活動に参加している。そして生き物について非常に博識であり、また、筆者の研究分野であるバイオロギングに興味を持っており書籍などからこれまでに行われた研究事例などを数多く学んでいた。今回の調査で使用した機

^{xi} 木庭先生ご本人がウナギ活動に大きな関心を持ち、またそれを愉しんでおられる点も活動にとって大きな財産である。それゆえ、公立高校教員の方々が避けて通れない異動により木庭先生が柳川を離れられた後のウナギ活動については、今後議論が必要となるだろう。

材について熱心に質問をし、調査中はその作業に積極的に参加するなど、すでにSPERAの最年少主要メンバーとなっている。その好奇心と学習意欲を継続しながら将来的に京都大学へ進学して筆者の所属する研究室の扉を叩いてくれることを望まずにはいられないが、現在のウナギコミュニティでの活動を通じて地域や世代を超えた協働により多くの経験を積んでもらいたい。そしてデザイン学が提唱する「十字型人材」のような社会を変革できる専門家に成長してくれるのではと期待している。

「デザイン学」への問い

- + 協議の場においてその環境はどれほどの影響力を持っているのだろうか？
(KRP拠点でジャズを流しておけば議論は深まっただろうか？)
- + 十字型人材の育成はどの年齢、学年から始めるのが効果的か？